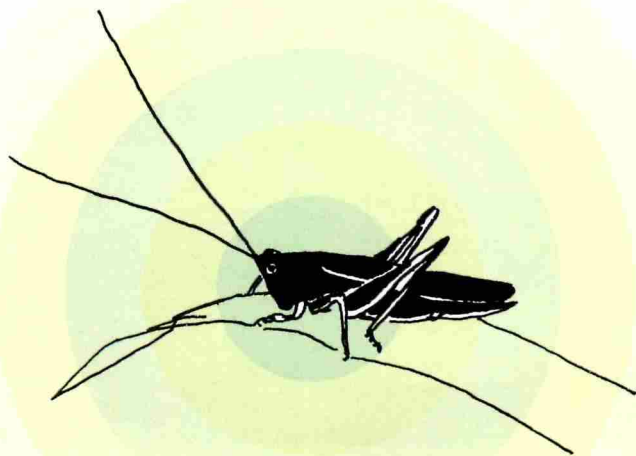


# 5. バッタのなかま



——— 大きさ（体長） ———  
頭の先から腹の先までの長さ

# オンブバッタ (バッタ科)

●よく見られる時期 6月～11月 ●大きさ 25～42mm

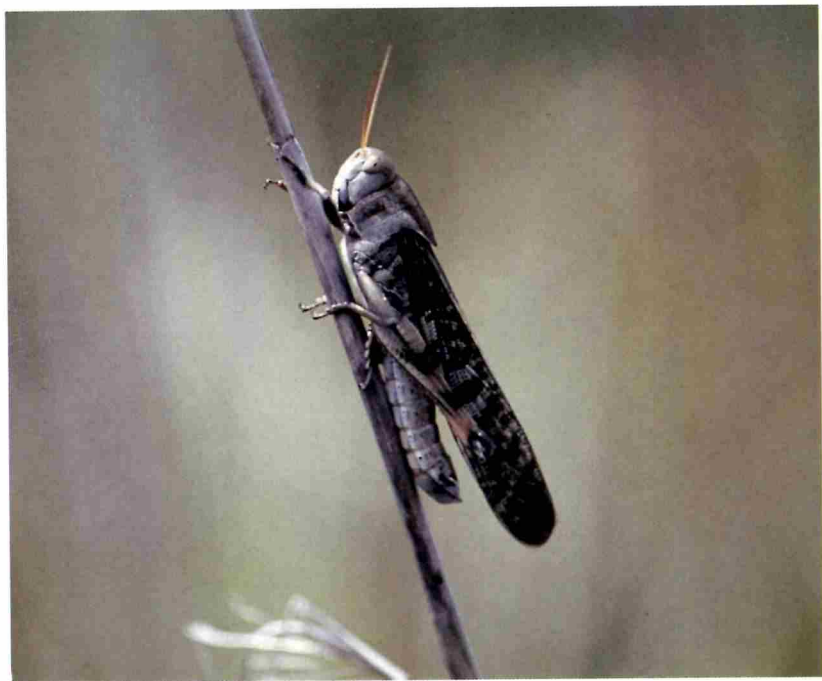


メスの上にオスが乗<sup>の</sup>っているところから、この名前がつけました。オスに比べてメスの方が体長がかなり大きいです。畑や草地でごくふつうに見ることができます。体の色には、緑色と灰色がか<sup>か</sup>った褐色などがあります。成長のちゅうでは変わりません。



# トノサマバッタ (バッタ科)

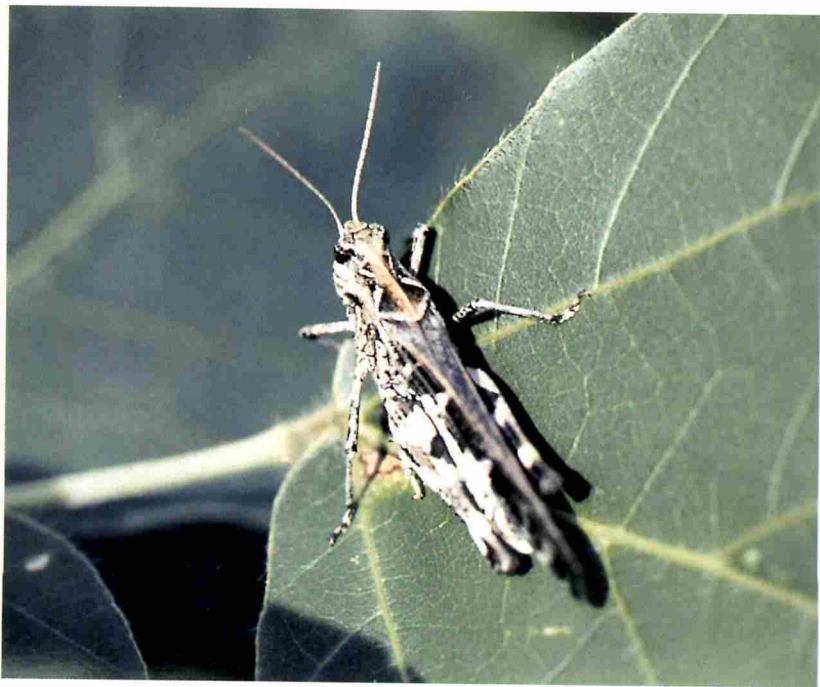
●よく見られる時期 6月～10月 ●大きさ 48～65mm



別名タイミョウバッタと呼ばれ、草地でふつうに見ることができます。体の色は、緑色と褐色があります。後翅は黄色みがかった透明で、紋や帯のようなものはありません。中国やアフリカでは大発生して大群となり、農作物を食べつくすことがあります。高密度で飼育するとふつうは見られない黒とオレンジ色のバッタになることがあります。

## クルマバッタモドキ (バッタ科)

●よく見られる時期 7月～10月 ●大きさ 31～45mm

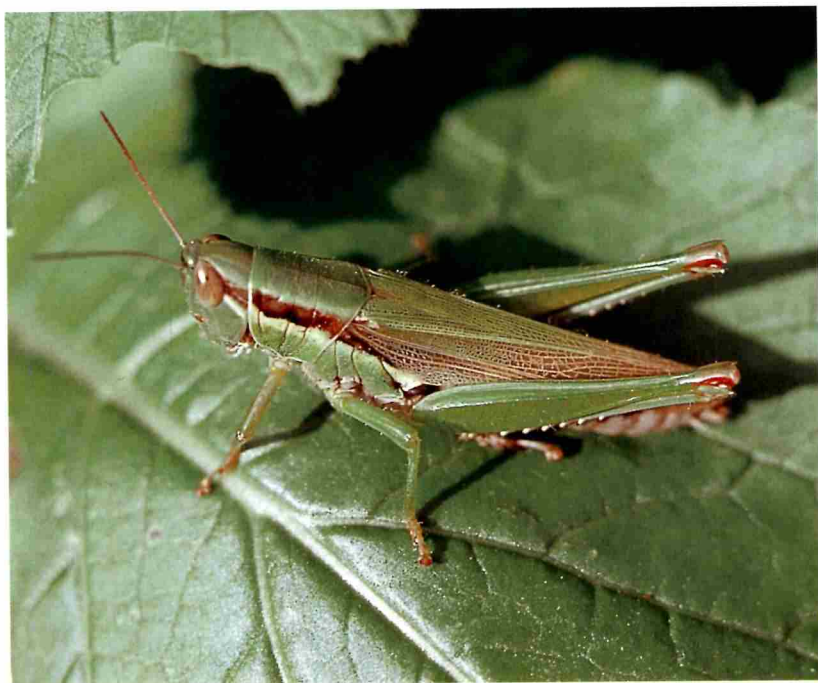


体は、ふつうは茶色ですが、ときに緑色のものも見かけられます。後翅<sup>こうし</sup>に、太くてうすい黒い帯のような模様<sup>もよう</sup>があります。荒れ地や草地、海岸の砂浜などでふつうに見ることができます。

昼間、活発に飛びまわります。

## コバネイナゴ (バッタ科)

●よく見られる時期 8月～11月 ●大きさ 28～40mm



バッタ

水田でよく見られ、イネを食べる害虫として知られています。つくだ煮にして食用にもなります。農薬の使用で一時は姿を消しましたが、最近はまだよく見かけるようになりました。前翅がやや短く、腹まで達しないところから、「小<sup>こ</sup>羽<sup>ばね</sup>イナゴ」と名前がつきました。

## ツチイナゴ (バッタ科)

●よく見られる時期 10月～5月 ●大きさ 40～50mm



バッタ

草原でよく見られますが、成虫で冬を越す特異なバッタです。後翅はうすいピンク色で、飛ぶとよく目立ちます。

## イボバッタ (バッタ科)

●よく見られる時期 6月～9月 ●大きさ 18～23mm



バッタ

荒れ地、農道、畑など、植物がまばらで土が露出した乾いた地面にいます。体と地面がほとんど同じ色のため目立ちません。



## ヒシバッタ (ヒシバッタ科)

●よく見られる時期 3月～11月 ●大きさ 7～11mm

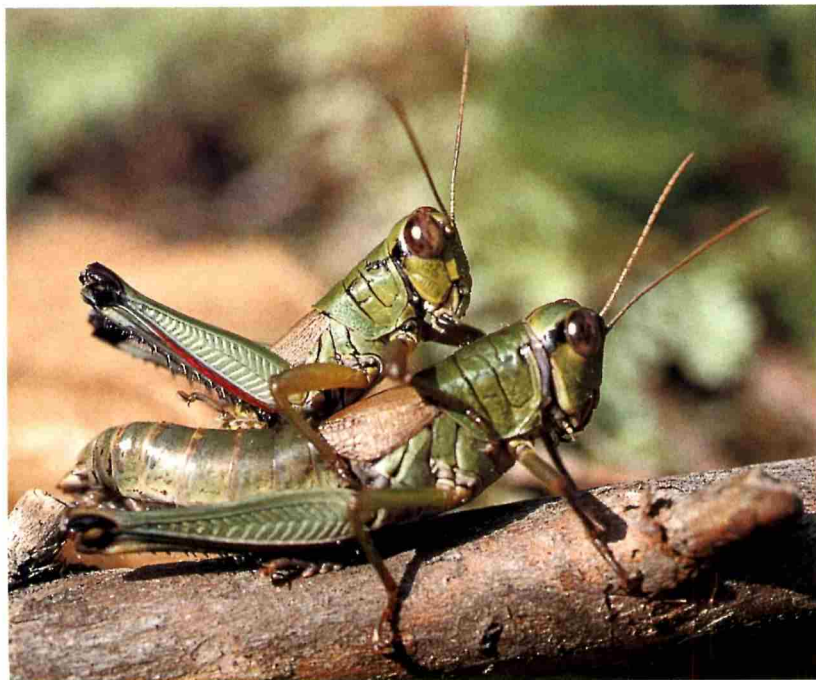


バッタ

日本全土に分布しています。翅<sup>はね</sup>で飛ぶことはなく、力強く発達した後ろ脚<sup>うしあし</sup>で飛び跳ねます。よく似た種類が多くいて、見分けるのは困難です。やや大型で胸の横にトゲのあるトゲヒシバッタや翅の長いハネナガヒシバッタは、翅を広げてよく飛びます。

## フキバッタの一種 (イナゴ科)

●よく見られる時期 7月～10月 ●大きさ 約20mm



丘陵地きゅうりょうちから山地の森の縁（ふち）によく見られ、フキヤクズなどの葉を食べます。翅はねが短いので、跳はねることしかできません。

そのため山や川が移動の障害となり、よく似たものでも場所ごとに違った種類に分けられています。

## ケラ (ケラ科)

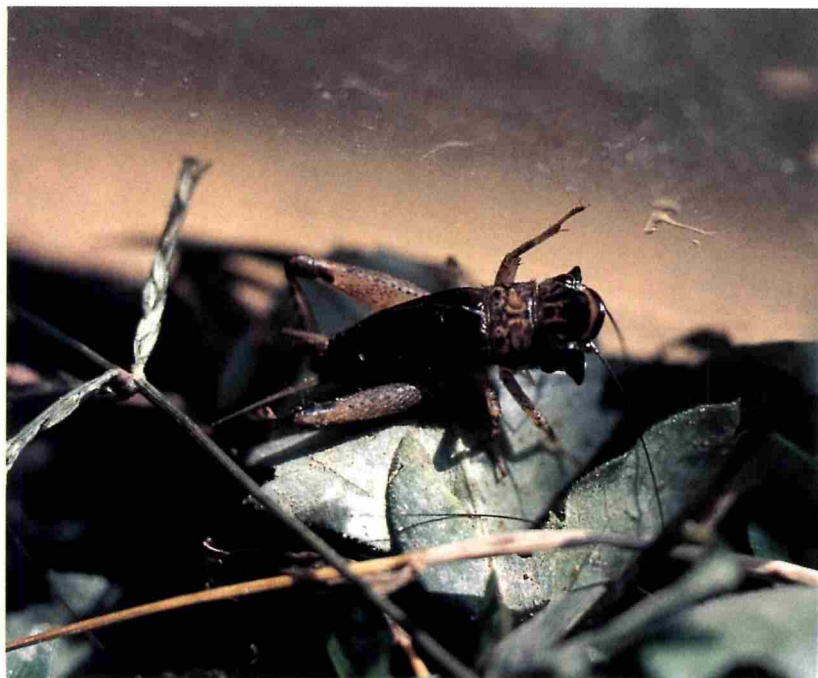
●よく見られる時期 6月～10月 ●大きさ 30～35mm



オス・メスともに鳴きますが、オスは「ジィ……」と低く続けて鳴きます。この声をむかしの人は、ミミズが鳴いていると考えていました。湿った土の中にトンネルをほってすんでいます。成虫で冬を越すものと、幼虫で冬を越し夏に成虫になるものがあります。暗い褐色の体で、全身に細かい毛が生えているので、水の上を上手に泳ぐこともできます。前脚は、シャベルのようになっていて土をほるのに適しています。

## ミツカドコオロギ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～10月 ●大きさ 15～20mm



「リッリッリッリッ」と4～5回の連続音をくりかえしてすどく鳴きます。オスの顔は切り取ったように前面が平たく、頭の上と頬ほほが出っ張っていて、全体には逆三角形になっています。畑や草原でふつうに見ることができません。

## オカメコオロギ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～11月 ●大きさ 13～15mm



乾いた草原などに多く見ることができます。オスの頭が変わった形をしており、前から見ると“阿亀（オカメ）”に似ているのでこの名がつけました。

## エンマコオロギ (コオロギ科)

●よく見られる時期 7月～11月 ●大きさ 26～40mm



バッタ

「コロコロリーリー」とふるえるような美しい声で鳴きます。

体の色は全体に黒褐色で、頭の部分にはつやがあります。雑食性で草地や畑、堤防や水田の土手などで見ることができます。跳ぶ力が強い大型のコオロギです。顔の模様でオスとメスを見分けることもできます。

## カネタタキ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～11月 ●大きさ 10～18mm

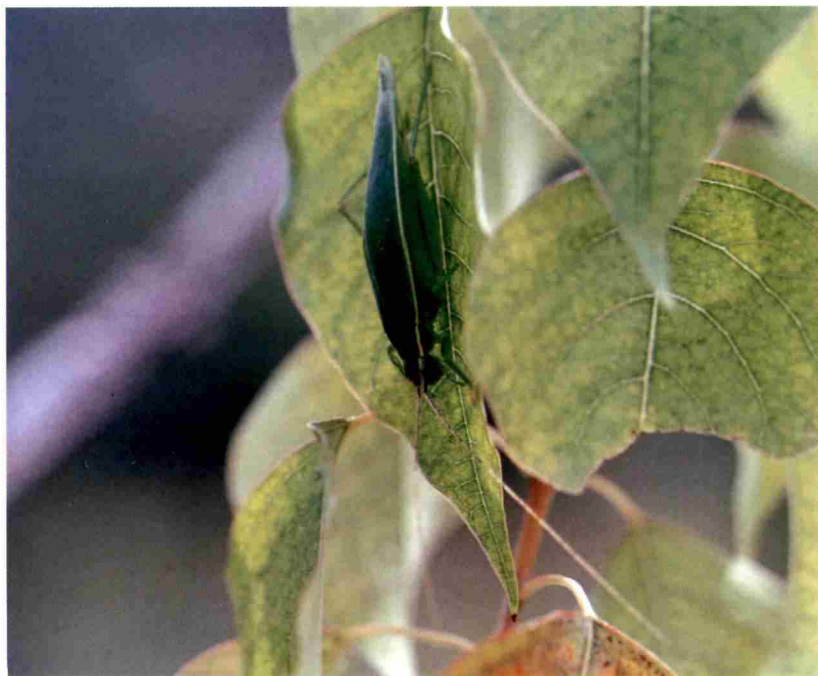


バッタ

「チンチン」と鉦<sup>かね</sup>をたたくような声で昼も夜も鳴きます。庭木や低木の上  
にすんでいます。平らな腹の部分は、うろこ<sup>うろこ</sup>のような粉<sup>お粉</sup>に覆<sup>おお</sup>われています。  
体の色は、褐色<sup>かっ</sup>、または暗い褐色で、オスにはうろこ<sup>うろこ</sup>状の丸い小さな翅<sup>はね</sup>が  
あります。メスには翅<sup>はね</sup>がありません。

# アオマツムシ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～11月 ●大きさ 23～28mm



「リーリーー」と、強かん高い声で鳴きます。街路樹や公園の木の上  
にすんでいて、飛ぶのがたいへんじょうずです。中国から来た帰化昆虫で、  
近年急速に増えました。ウメやモモ、サクラの木などに多く、体は木の葉に  
似た緑色の美しい舟のような形をしています。夏の間は夜に鳴き、秋になる  
と昼間も鳴き声を聞くことができます。



## マツムシ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～11月 ●大きさ 18～22mm



バッタ

スズムシと共に、秋の鳴く虫の代表者として有名です。主に乾いた草原にすみ、スズムシよりは簡単に採集できます。「チンチロリン」と鳴きます。

## スズムシ (コオロギ科)

●よく見られる時期 8月～10月 ●大きさ 17～25mm



「リーンリーン」と鈴すずのような鳴き声を楽しむため、むかしから人に飼育されています。たくさん飼うと鳴き声がかかります。翅はねを真上に立てて、こすり合わせて鳴きます。マツムシまと異ことなり、湿った背の高い草の下の地面に穴を掘ってすんでいます。

## クサキリ (キリギリス科)

●よく見られる時期 8月～10月 ●大きさ 40～55mm



夜、「ジー」と、とぎれずに長くのばして鳴きます。水田の土手などの背の低い湿った草地で見ることができます。体の色は、緑色と褐色の2つのタイプがあります。

## クビキリギス (キリギリス科)

●よく見られる時期 10月～5月 ●大きさ 57～65mm



成虫で越冬<sup>えっとう</sup>し、枯れ葉の間などにじっとしているのを見かけることがあります。夜、木の上や草に止まって、するどい声で「ジーン」と長く続けて鳴きます。体の色は、緑色と褐色<sup>かっ</sup>の2つのタイプがあります。頭の先がとがって突き出たようになっています。水田の土手や草地、堤防などにすんでいます。

## クツワムシ (キリギリス科)

●よく見られる時期 8月～10月 ●大きさ 50～53mm



林の下草<sup>したくさ</sup>や背たけの高い草むらにすみ、暗くなってから「ガチャガチャ」と、たいへんやかましく鳴きます。鳴き声からガチャガチャとよぶところもあります。体の色には、緑色と黄色味を帯びた褐色、赤味をおびた褐色<sup>かっ</sup>などいろいろと変化があります。鳴く虫の中では、体の大きい方です。草食性で、ツユクサやギシギシを好んで食べます。

## キリギリス (キリギリス科)

●よく見られる時期 7月～9月 ●大きさ 38～57mm



「チョーンギース」と日当たりのよい草地で、昼間によく鳴きます。メスの産卵管は、剣のように長くなっています。体の色は緑色がほとんどですが、まれに褐色のものがいます。前脚と中脚に鋭いトゲがあり、他の虫を捕まえて食べることもあります。

## ツユムシ (キリギリス科)

●よく見られる時期 7月～11月 ●大きさ 29～37mm



「ジ、ジ、ジ、ジィ、ジィ」と鳴きますが、弱い音でなかなか聞き取れません。明るい草地や川原などで、ヨモギなど背の高い草の上に止まっているのが見られます。ほとんどが、緑色をしています。年2回発生します。

## セスジツユムシ (キリギリス科)

●よく見られる時期 7月～11月 ●大きさ 13～22mm

「チチチ ジーッチジーッチ」と鳴きます。林の縁（ふち）に多く、草の上にすんでいて、主に夜活動します。背中に褐色のすじがあるのが特徴です。前脚にはトゲがなく、翅は細くスマートです。



## クラズミウマ (カマドウムマ科)

●よく見られる時期 一年中 ●大きさ 約20mm



クラズミウマは床下や室内などにすんでおり夜になると活動し始めます。体は褐色をしていて、脚が細長く先のほうにはとげがあります。よく似たマダラカマドウムマは野外の洞穴や木のうろなどで見ることができます。年中、卵から成虫までの姿を見ることができます。



# オオカマキリ (カマキリ科)

●よく見られる時期 9月～11月 ●大きさ 70～95mm



(卵のうから出る子虫)

体の色は、緑色をしています。前脚がカマのようになっていて、えものをつかまえやすくなっています。林のへりや低木地帯で見ることができます。よく似たチョウセンカマキリとは、後ろ翅の色で見分けることができます。オオカマキリは黒紫色のまだら模様があり、チョウセンカマキリには黄褐色のまだら模様があります。

# ハラビロカマキリ (カマキリ科)

●よく見られる時期 8月～10月 ●大きさ 50～70mm



(成虫)



(幼虫)

腹の部分はふちが丸くて、幅が広いことからこの名前がついたようです。上の翅（前翅）の中央には、白い模様が見られます。主に、木の上で生活をしています。幼虫は腹の先を上にとらしていることが多く、体の色は緑色と紫がかった褐色があります。

## 〔カマキリの卵のう〕

### 《卵のう》

カマキリのなかまは、産卵のときに出すねばねばしたアワ立った液を分泌ぶんぴし卵をおおいます。卵のうは外敵がいてきや急激な温度の変化から卵を守っています。しかし、カマキリの卵のうを専門に食べる虫もいます。(カマキリタマゴカツオブシムシ)

### オオカマキリの卵のう

草の茎や小枝などに産みつつけられ、やわらかくてほぼ球形をしています。



### コカマキリの卵のう

かべや石の下に産みつつけられる小さい卵のうです。



### チョウセンカマキリの卵のう

草の茎や板べいなどに産みつつけられ、かたくて細長い形をしています。

# ナナフシ (ナナフシムシ科)

●よく見られる時期 7月～10月 ●大きさ 69～95mm



ナナフシモドキとも呼ばれ、コナラ林で多く見ることができます。ナナフシのなかまにはオスの数が極端に少ないものがあり、メスだけで生殖を行っていることも考えられます。振動が伝わると、体と脚を伸ばして小枝のようになってしまいます。体は緑色で細長く、短い触角があります。

## トゲナナフシ (トビナナフシムシ科)

●よく見られる時期 9月～10月 ●大きさ 約60mm



秋に森の中の小道を歩くと、地表をゆっくり歩くトゲナナフシによく出会います。ナナフシよりも体は太く、背中にトゲがあります。

花の上で休む虫

